



Rimbaud の Fatalite

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 多紀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000922

Rimbaud の Fatalité

宮 本 多 紀 雄

北海道学芸大学釧路分校外語外文第二研究室

Takio MIYAMOTO : Sur la Fatalité de Rimbaud

Sur la Fatalité de Rimbaud

Takio MIYAMOTO

Les mondes de Arthur Rimbaud sont profonds, vastes, polyèdres, compliqués, monstrueux et délirants. D'après notre logique pratique ils sont le désordre même. D'où il nous est impossible de les saisir totalement à la fois. En montant pas à pas leurs étapes, nous avons à les étudier sous divers angles. Et nous voulons obtenir des indices pour comprendre que le désordre des créations de Rimbaud, autrement dit son raisonné dérèglement, n'est seulement que le manque d'ordre contraire à la vue profitable à l'utilité de la société civilisée, qu'il est l'ordre des mondes intérieurs de Rimbaud. Pour cette raison, j'ai recherché ici la fatalité de Rimbaud.

Sa fatalité était le bonheur et celui-ci est devenu celle-là, mais ce dérivait de sa conscience de malheur. Outre cela il y avait la source de son malheur dans la maison de ses parents. Rimbaud était le fils de famille, mais Madame Rimbaud l'a rendu malheureux à cause de son attitude incompréhensive et dominatrice envers ses enfants. Rimbaud avait faim de révolutionner son malheur dans sa maison instructive, puis il partit pour les luttes spirituelles comme créateur.

Rimbaud ne prenait pas prétexte des mondes créateurs pour échapper du monde pratique. Il résistait à l'organisation civilisée, aux directeurs de la civilisation, à la hiérarchie de missionnaires et à la nouvelle noblesse qui emploie la science à la mauvaise action. Et le bonheur, qui était sa fatalité, se changeait en son remords, en son ver.

Rimbaud avait encore le désir de révolutionner la vie domestique comme la vie civilisée. Mais on ne peut pas exécuter la conception de Rimbaud par l'amélioration ou la révolution sociales. Elle était la rêverie que nous pouvons exécuter dans seul l'univers intérieur. Et Rimbaud y était le très pur amour même. En vivant sa fatalité, il nous a donné une possibilité de révolutionner nos corps et d'embrasser les nouveaux corps.

Rimbaud の内的世界に入ると、われわれは彼の不幸の深さと大きさによつて驚かされてしまうのである。彼は作品のいたるところで彼自身の不幸を述べたてているのである。しかも彼の個人的不幸はぐさりとわれわれの肺腑をえぐるのである。それは彼の不幸が単に彼個人の不幸であるばかりではなく、万人の不幸であるからである。Une saison en enfer¹⁾ の苦渋に満ちた世界を読み進み、《N'eus-je pas une fois une jeunesse aimable, héroïque, fabuleuse, à écrire

sur des feuilles d'or,-trop de chance! Par quel crime, par quelle erreur, ai-je mérité ma faiblesse actuelle? Vous qui prétendez que des bêtes poussent des sanglots de chagrin, que des malades désespèrent, que des morts rêvent mal, tâchez de raconter ma chute et mon sommeil...》²⁾ という詩に接すると、われわれは Rimbaud の苦しみは普遍的なものであることが理解できるのである。そして彼が崇高な陶酔の塔から転落し、麻痺状態の眠りにおそわれざるを得なかつた不幸の原因は一体なんであるのかという問が、われわれの胸中の深みに発生するのである。そしてこの問に対する答を暗示する鍵とも思われる次のような言葉を、われわれは錯乱した複雑怪異な Une saison en enfer という incantation³⁾ の中に発見できるのである。

(1) 《…Parents, vous avez fait mon malheur et vous avez fait le vôtre...》⁴⁾

(2) 《…Cette famille est une nichée de chiens. Devant plusieurs hommes, je causai tout haut avec un moment d'une de leurs autres vies.-Ainsi, j'ai aimé un porc...》⁵⁾

(3) 《…Un bel avantage, c'est que je puis rire des vieilles amours mensongères, et frapper de honte ces couples menteurs...》⁶⁾

これらの詩句はいずれも家庭をののしつているのである。(1)は両親が彼の不幸をつくつたことをあしざまにいい、(2)は親と子供たちの生活をどなりちらし、(3)は夫婦関係を侮辱しているのである。たとえ彼が《周囲との社会的連帯性を信用しない完全を求め、未知なるものに到達しようとした》⁷⁾ としても、非情な外的世界に対する厳しい抵抗のよりどころとして、せめて家庭という憩の場だけは、そつとしておいて妥協するのではないのかと、誰しも推測するのであるが、そのような推測を以上のような詩句で Rimbaud は拒否してしまうのである。従つてこれらの詩句は複雑怪異な incantation の中でも殊に異様な特色をもつにいたるのである。そしてわれわれには、Rimbaud が彼の fatalité である創造的幸福を求めた、不幸の原因を解明する鍵を残していつたように思われるのである。特に(1)の詩句では、彼の不幸は両親がつくつたのであり、両親は彼等の不幸をつくつたと明言しているのであるから、われわれは、彼の家庭について研究することによつて、彼の不幸の原因を究明できると思うのである。次いでその不幸を、彼がどのように普遍化し、変革しようとしたかという問題を、発展的に研究できると思うのである。そして彼の fatalité を理解し得ると思うのである。

1

Henry Miller は Rimbaud 論の中で、Rimbaud の行動や詩の中に熱のない光りがあり、それは彼が母親から受けついだ要素である、という意味のことをいつているが⁸⁾、Rimbaud の不幸は両親がつくつたというよりも、母がつくつたといえるくらい、彼の母 (Vitalie Cuif) は、彼に大きな苦しみを与えた女性であり、しかも実用主義的な思いやりのない女性であつた。

今日に於ても、日増しに重要性の度合を深めている巨匠は、1854年10月20日、Ardenne 県の Charleville に生れたのである。平凡な家庭の子供であつたが、彼の6歳のとき、すでに父 (Frédéric Rimbaud) と母との別居は確定的であつた。父からは高い中ぶくれの額、鋭い青い目、あかるい栗色の髪、低めのいくらかそつた鼻、肉感的な果肉の多い口もとというような肉体的諸特徴や、尽きることのない好奇心、旅行や語学の趣味というような性格的諸特徴を受けついたのである⁹⁾。このような諸特徴を父から受けついだ Rimbaud は、後に父と同一化してしまい¹⁰⁾、父が母と別れてしまつたように、彼もまた、母から少しでも遠いところへ旅だつ身となつたのである。

夫と別居した母は、彼女の子供たちである2人の息子（長男の Jean-Nicolas Frédéric と Jean-Nicolas Arthur）と2人の娘（Jeanne-Rosalie-Vitalie と Frédérique-Marie-Isabelle）に対し、信仰狂いのどぎつい態度でのぞんだのである。母が彼女の子供たちに無理解な威圧的態度で接したため、Rimbaud は抵抗することを母のかたわらで学び、宗教や社会や芸苑に反抗する前に、彼は家族に逆らうことになつたのである¹¹⁾。

母のこのようなしつけは、夫のいなくなつた家庭では、しつかりと子供たちを彼女に結びつけておくことが必要であり、将来子供たちが実社会で確実に実利を得れるような教育を授け、彼等が巧みな渡世技能をつけ有用な働きくぐつになつて、家庭にもなるべく多くの実利をもたらすようにという、欲深い期待を子供たちにかけてからに外ならないのである。しかしそのようなしつけは、母の期待に反する作用を子供たちにおよぼし、殊に彼女と Rimbaud との不和は和らげがたいものにまで発展したのである。彼は *Les poètes de sept ans*¹²⁾ の中で、

Et la mère, fermant le livre du devoir,
S'en allait satisfaite et très fière, sans voir,
Dans les yeux bleus et sous le front plein d'éminences,
L'âme de son enfant livrée aux répugnances.¹³⁾

と母のしつけに対する彼の気持の反応を述べているのである。全く家庭の雰囲気は、母の専横なやり方によつて重苦しく、悲しい不調和なものになつたのである。彼は遊び時間もないような詰込主義の勉強をやらされたり、4人の子供たちだけで行列をつくり、母に見張られながら教会へ通うよりも、むしろ latrines を好んだのである。Latrines とは、非情な拘束の多いところでは他者との連帯関係から自己を独立させ、人間と動物と共通する排泄や悪臭や醜状の中に身をおき静かに自分の考えにふけることのできる休息所である。

A se renfermer dans la fraîcheur des latrines ;
Il pensait là, tranquille et livrant ses narines.¹⁴⁾

この latrines を好んだ彼の魂は、恒心と忍耐によつて、節約と勤勉を徳目としながら、自然の物体であり、機械でもある、実務に合目的々な存在として、実社会のかりそめの秩序によつて強制された軌道を、唯一、絶対的な現実と思ひ込み、その上を、ひたむきに突走ることしか考えられない文明人となり、後に Rimbaud が ≪…Ces millions de gens qui n'ont pas besoin de se connaître amènent si pareillement l'éducation, le métier et la vieillesse,≫¹⁵⁾ と述べたような恐ろしい死を、母その人が、彼に強要することに対する呪いであつた。Rossa 学塾に入った頃の Rimbaud は、母の目を盗んでは、色のさめたぼろ服を着た、頭の弱いおつとりしたような仲間と遊ぶよになつたのである。要するに、彼は実生活の有効性にのみ関心を抱くことしか知らなかつた母のしつけから、本能的に解放されようとして、無効な面へ自由に飛躍することによつて、楽しむことを覚えたのである。

Et si, l'ayant surpris à des pitiés immondes,
Sa mère s'effrayait ; les tendresses profondes

De l'enfant se jetaient sur cet étonnement.
C'était bon. Elle avait le bleu regard,-qui ment!¹⁶⁾

母に対するこのような呪いは同時に不幸の意識であり、不調和を調和であると無理に信じこませる、偽の調和を生きる死という、欠如の感覚である。子供たちにとって母がいること (être) と、いないこと (ne pas être) とは同じことになる。単なる存在は、欠如となつてしまうのである。

On sent, dans tout cela, qu'il manque chose...
-Il n'est donc point de mère à ces petits enfants,
De mère au frais sourire, aux regards triomphants?
Elle a donc oublié, le soir, seule et penchée,
D'exciter une flamme à la cendre arrachée,
D'amonceler sur eux la laine et l'édredon
Avant de les quitter en leur criant: pardon.
Elle n'a point prévu la froideur matinale,
Ni bien formé le seuil à la bise hivernale?...
-Le rêve maternel, c'est le tiède tapis,¹⁷⁾

Rimbaud にとって母とはなまあたかいかいしとねであり、夢の中にしか実在しないものなのであり、子供たちが沢山の清らかな夢を見ながら眠っている柔らかなねぐらなのである。このような母の欠如は、少年時代だけのことではなく、彼が家庭から離れて詩人となり、更には実業界の人となつても同じことであつた。非情な実社会とのたたかいに疲れて家庭に帰つて来る度に、母は彼の傷口をこずくことしかしなかつたのである¹⁸⁾。つらく悲しい彼の fatalité を詩人に背負わせた家庭生活によつて、彼は不幸を意識し、それを苦悩と努力とによつて調和あるものにし、欠如を実在に変革しようとした。そのような飢えが彼の raisonné dérèglement¹⁹⁾ に発展するのは必然的である。

Mes faims, tournez. Paisez, faims,
Le pré des sons.²⁰⁾

1870年1月、Charleville の collège に修辭学の教師である Georges Izambard が就任し、このなかなか才能のある教師²¹⁾は、Rimbaud の飢えを理解しようとしてくれる人物になつた。しかも若い教師の書庫は Rimbaud に精神的栄養を与えたのである。そして彼は削除したところのある古典やキリスト教的なものと離別し、新しい広い範囲にわたる読書を始めたのである²²⁾。あるときは Victor Hugo のものを読んだといつて母との間に悶着を起したこともあり、母を呪つたように、Napoléon を呪い、次第に創造家として、新しい内的世界へ飛躍する、精神的たたかひへと関心を深めていつたのである。

Rimbaud の呪いはやがて文明の支配的操り手たちに向けられるにいたつたのである。彼等によつて、この世の地獄が解消されたことも、されるであろうこともないのである。彼等は唯、ふてぶてしくしたり、へりくだつたりしなければ、話しかけることもできない連中にすぎないのである²³⁾。Rimbaud は酔いしれた労働者の言葉に託して、支配的操り手たちに対し不幸を述べたことになつたのである。

«Oh, tous les Malheureux, tous ceux dont le dos brûle
 Sous le soleil féroce, et qui vont, et qui vont,
 Qui dans ce travail-là sentent crever leur front,
 Chapeau bas, mes bourgeois! Oh! ceux-là, sont les Hommes!
 Nous sommes Ouvriers, Sire!.....»²⁴⁾

家庭や文明組織内に於ける生活は Rimbaud に呪いを抱かせ、そこに彼は不調和と不幸の意識から発生する飢えによつて幸福を求めたのである。彼は《Le Bonheur était ma fatalité,》²⁵⁾ ということを本能的に悟つたのである。全く、広々とした果しない創造世界があるのに、文明の組立の内側に、全面的に閉じこめられた人間はみじめである。そこでは誰もがいわずに実力を競い合つているが、人間はひたすら自分の目を閉じ、耳をふさいであえいでいるのである。生と恵みの太陽は、この文明生活の彼方、よろこびにのたうつ世界に、愛の炎をふりそそいでいるのである。

Chair, Marbre, Fleur, Vénus, c'est en toi que je crois!²⁶⁾

しかし Rimbaud はまた、幸福は彼の悔恨 (remords) であり、心中の虫 (ver) であつたともいつている²⁷⁾。彼にとつて幸福が救いではなく、悔恨であり心中の虫となつたのはどうしてであろうか。それは彼が創造世界というものを、実世界からの単なる逃避の口実である観念的世界とは考えていなかったからである。もしそのように彼が考えていたならば、創作をしたり芸術を放棄したりするようなことなどしなかつたであろう。彼は自分の創造世界によつて堂々と実世界に抵抗したからこそ、彼の fatalité である幸福を、悔恨や心中の虫にしてしまつたのである。このことは単に Rimbaud 個人の悲劇であるばかりではなく、人類のぎりぎりの生存の悲劇でもある。

彼の fatalité は、彼の目を、伝道組織の中で虚偽の心を養い、肉体を汚れたものにしてしまつた、宗教人たちに向けさせたのである。彼は《…Sur mon lit d'hôpital, l'odeur de l'encens m'est revenue si puissante; gardien des aromates sacrés, confesseur, martyr…Je reconnais là ma sale éducation d'enfance.》²⁸⁾ と述べている。母の強要によつて受けさせられた宗教々育から彼が学んだのは、宗教組織というものは、神についてのおしやべりによつて神を汚し、神から遠ざかつて行く、真の神とは無関係な伝道組織にすぎないということであり、そして洗礼を受け、着物をきて、働かなければならないということだけであつた²⁹⁾。宗教とは文明社会の奴隷の数をふやすのに都合のよい信心に外ならないのである。

虚栄心と貪欲とが金持連中というなりあがり貴族をつくりあげたように、19世紀後半ともなれば、今や科学によつて新貴族となれる時代がやつて来たのである。文明人は虚栄心と貪欲によつて科学に飛びつき、新貴族になろうと懸命になつた。しかしその結果がどうなつたであろうか。

われわれは Rimbaud が次のように述べているのを読むと思わずはつとするのである。《…Dans les villes la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire, comme une glace quand la lampe circule dans la chambre voisine, comme un trésor dans la forêt!…》⁹⁰⁾

彼のこのような *présage* を、われわれはどのように受けとればよいであろうか。彼は自分の *fatalité* を生きぬくことによつて、このような *présage* を述べることができたのである。われわれは、彼の天才に驚くとともに、この *présage* は、われわれをぎりぎりの立場に追い込む悲劇の *présage* であるとして、受けとらなくてはならないであろう。

3

Rimbaud にとつて、すべての文明生活が変革されなければならないものであつた。しかし彼の意欲は政治的の革命⁹¹⁾などによつて実現し得る低俗なものではなかつたのである。そして家庭生活も変革しなければならないものであつた。彼は 《…Quant au bonheur établi, domestique ou non…, non, …》⁹²⁾ と語っている。文明と同一化した家庭の土台である古びた愛は、変革して再びつくり直す必要があるのである⁹³⁾。自分の欲望にひきずりまわされている男と、かたづくことしか考えられない女とが結合しているのが愛であろうか。彼は文明人の家庭生活のすべてを透視してしまつた⁹⁴⁾。文明と同一化した家庭生活とは、文明の一部品にすぎず、そこから生れるものは機械にすぎないのである。そして文明の危機に拍車をかけるだけである。そこでは真の休息をとることはできなくなつている。どこの家庭でも頭を休めるということは大分前からできなくなつていたのである。唯、慣習に盲従して、そこで油をさしているにすぎないのである。どつちを向いても家庭生活は、文明の製造する実用品や放出する毒素の荒海に難破しかかつており、誰もが腐肉を宝物のように思い込んでいるのである。

従つて Rimbaud は結婚式に仲間たちのように調子がだせなかつたのである⁹⁵⁾。彼は習慣に盲従して結婚するよりは、むしろ自分の *fatalité* に生きることを望んだのである。彼は、美男子であり、なんでもやれた人物である。どうして、適当な女性を発見できないはずがあるろうか。彼が Verlaine と同棲したのも⁹⁶⁾、彼自身の *fatalité* に生き、方法的な *raisonné dérèglement* によつて家庭生活を変革し、新しい家庭を創造しようと試みたからである。しかし彼と Verlaine との共同生活もまた、彼の *fatalité* である幸福を悔恨や心中の虫にしてしまつたのである。創造への精進によつて実生活に抵抗したからである。

彼はその創造について次のようにいつている。《Je suis un inventeur bien autrement méritant que tous ceux qui m'ont précédé; un musicien même, qui ai trouvé quelque chose comme la clef de l'amour.》⁹⁷⁾ 彼は愛というものの鍵のようなものを発見した音楽家でさえある。しかも先だつ人々とは全く違つた功勞をたてたのである。家庭生活を変革するには聖化された新しい肉体⁹⁸⁾が創造されなければならないのである。腐肉は遠くへ投げ捨てなければならないのである。大昔から誰もがやつて来たように、習慣に従つて家庭を営んでいたならば、われわれは聖書の予言に敗北するだけであろう。だからといつて文明社会の一部品にすぎない現代人が、文明社会の仕組を、いくらいじくりまわしたところで、われわれの肉体が新しくなりはしないのである。低俗な改良や革命によつてはなにも新しくはならないであろう。だからこそ彼は 《…Arrière ces superstitions, ces anciens corps, ces ménages et ces âges. C'est cette époque-ci qui a sombré!…》⁹⁹⁾ というのである。

Rimbaud によつてわれわれの家は開き放たれ、飲みものや食べものは清められたのである。正

しく彼こそ真の愛ではないか。そして彼の創造世界の中で、われわれの肉体は聖化されるのである。彼は ≪…les Corps sans prix, hors de toute race, de tout monde, de tout sexe, de toute descendance!…≫⁴⁰⁾ と述べて、惜しげもなく彼の夢想をわれわれに提供するのである。Rimbaud の内的世界に於て、われわれは新しい肉体という未知なるものに、われわれ自身の肉体を変革し得る可能性を与えられるのである。自分の fatalité に苦しみぬき、それから逃避することなく創造することによつて、Rimbaud は純粋な愛そのものとなつたのである。

Rimbaud の世界は広く深いのであり、多面的であり、複雑怪異に錯乱している。われわれの実用的論理に従えば無秩序そのものである。従つてわれわれは全的、同時的に Rimbaud を理解することは不可能である。われわれがどのように完全に理解したと思つていても、やがて部分的にしか理解していなかつたということがわかつて来るのである。そこでわれわれは一步一步段階を踏みながら、色々な角度から研究することが必要である。そして彼の創造した、raisonné dérèglement という方法による無秩序は、われわれの実社会の考え方や見方によつて無秩序であるとされているだけであつて、彼がより高次の別世界に於ける秩序を打ちたてようとしたものであることを理解する、手がかりを得たいと思うのである。そこでこの研究では Rimbaud の fatalité という問題を解明したのである。

Rimbaud にとつて fatalité とは幸福であつた。しかし幸福が彼の fatalité になつたのは不幸の意識によつてであつた。そして彼の不幸の原因は彼の生家にあつたのである。彼は平凡な良家の子弟であつたが、彼の母の無理解な威圧的態度と、教育方針によつて不幸になつたのである。彼は文明と同一化した家庭生活の中で、不幸を変革しようとする飢えを感じたのである。そして raisonné dérèglement によつて、創造家として、精神的たかひへ出発することになつたのである。

Rimbaud は創造世界というものを実世界から逃避する単なる口実とは考えず、自分の創造によつて、文明組織や文明の支配者や宗教組織や科学を悪用する新貴族に抵抗したのであつた。そして彼の fatalité である幸福を悔恨や心中の虫にしてしまつたのである。

Rimbaud はまた文明生活と同じように家庭生活も変革しようとした。しかし彼の変革の意思は決して文明社会の改良や革命という低俗なものによつて実現され得るものではなかつた。それは創造によつて内的世界に於てだけ実現し得る夢想であつたのである。そして彼の夢想によつて彼は純粋な愛そのものとなり、彼自身の fatalité を生きぬいて、われわれの肉体を新しい肉体に変革し得る可能性をわれわれに与えたのである。

(1962・8・30)

註

- 1) この論文に於て、Rimbaud の詩は次の書物から引用する。
Arthur Rimbaud : Poésies, Édition critique par H De Bouillane De Lacoste, Mercure de France.
以下 (A) とする。
Arthur Rimbaud : OEuvres complètes, Bibliothèque De La Pléiade. 以下 (B) とする。
Arthur Rimbaud : Illuminations, Painted Plates, Édition critique par H De Bouillane De Lacoste, Mercure de France. 以下 (C) とする。
- 2) (B), Une saison en enfer, Matin, p. 242.
- 3) 拙稿: Mallarmé の Héroïade について, 北海道学芸大学紀要, 第 1 部12巻 1 ~ 2 号A, 参照。
- 4) (B), Une saison en enfer, Nuit de l'enfer, p. 226.
- 5) Ibid. Une saison en enfer, Délires II, p. 237.
- 6) Ibid. Une saison en enfer, Adieu, p. 244.
- 7) 拙稿: ランボオにおける Le Raisonné Dérèglement について, 北海道学芸大学紀要, 第 1 部10巻 2 号,

参照。

- 8) Henry Miller : Rimbaud, Traduction de F. Roger-Cornaz, p. 122参照。
- 9) これらの諸特徴については Jean-Marie Carré : La Vie Aventureuse De Jean-Arthur Rimbaud, Librairie Plon, chap. I, p. 3 参照。
- 10) Henry Miller : Rimbaud, Traduction de F. Roger-Cornaz, p. 123参照。
- 11) Jean-Marie Carré : La Vie Aventureuse De Jean-Arthur Rimbaud, Chap. I, p. 4 参照。
- 12) Ernest Delahaye : Souvenirs Familiers, Albert Messein, p. 29 以下によると Les Poètes de sept ans の中には兄の Frédéric と Arthur の 2 人が結合していると記されてある。
- 13) (A), Les Poètes de sept ans, p. 143.
- 14) Ibid. p. 144.
- 15) (C), Ville, p. 88.
- 16) (A), Les Poètes de sept ans, p. 144.
- 17) Ibid. Les étrennes des orphelins, p. 53.
- 18) (B), Correspondance à Paul Demeny, 28 août 1871, p. 279参照。
- 19) 註7) の拙稿参照。
- 20) (B), Une saison en enfer, Délires II, p. 236.
- 21) Georges Izambard : Rimbaud tel que je l'ai connu, Mercure de France, Chap. V, p. 40 以下によると, Izambard は Rimbaud と友達のように交際したが, 政治上の問題を語ったことはないのである。しかし天才的詩人が Izambard の共和主義的思想に感ずかないということもあり得ないのである。
- 22) Jean-Marie Carré : La Vie Aventureuse De Jean-Arthur Rimbaud, chap. II, p. 24 及び Robert Goffin : Rimbaud Et Verlaine Vivants, Rimbaud collégien, p. 121以下参照。
- 23) (B), Une saison en enfer, L'impossible, p. 239参照。
- 24) (A), Le forgeron p. 80.
Jean-Marie Carré : La Vie Aventureuse De Jean-Arthur Rimbaud, chap. II p. 25によると, ある晩 Charleville の街の中で, 酔いつぶれて感覚の鈍った一人の労働者が「俺は放蕩者なのだ」と繰返していたのが刺激になつたようである。
- 25) (B), Une saison en enfer, Délires II, p. 238.
- 26) (A), Soleil et Chair, p. 60.
- 27) (B), Une saison en enfer, Délires II, p. 238参照。
- 28) Ibid. Une saison en enfer, L'éclair, p. 241.
- 29) Ibid. Une saison en enfer, Mauvais sang, p. 224参照。
- 30) Ibid. p. 223.
- 31) 註7) の拙稿参照。
- 32) (B), Une saison en enfer, Mauvais sang, p. 225.
- 33) Ibid. Une saison en enfer, Délires I, p. 229参照。
- 34) Ibid. Une saison en enfer, Mauvais sang p. 220参照。
- 35) (C), Vies II, p. 76参照。
- 36) Robert Goffin : Rimbaud Et Verlaine Vivants, Le drôle de ménage, p. 145以下参照。
- 37) (C), Vies II, p. 75, p. 76.
- 38) (B), Une saison en enfer, Adieu, p. 243参照。
- 39) (C), Génie, p. 132.
- 40) Ibid. Solde, p. 111.